

# 高等教育研究センター

## Research Center for Higher Education


# Newsletter

### No.048

目次

2020.9

■ 「学習に関するアンケート」  
 (2019年度) に関するご報告  
 高等教育研究センター 講師 李 敏

■ スタッフからひとこと 

 信州大学 | 高等教育研究センター  
 SHINSHU UNIVERSITY

今月号は、IR特集です。

昨年度に実施した「学習に関するアンケート」についてご紹介します。信大生の各種活動時間、成績との関係、進級による活動時間の変化の調査結果をご覧ください。

## 「学習に関するアンケート」(2019年度)に関するご報告

日本の大学生は海外の大学生と比べて勉強しないという批判はよく耳にします。その批判が的を射ているかどうかはともかく、日本の大学生、特に信大生ははたしてどのくらい勉強しているのか、先生方もきっと大きな関心を持っているのではないのでしょうか。

授業以外に、信大生の授業と関連する「自学自習」、授業と関連しない「自主的学習」、および「サークル・部活動」、「アルバイト」などの各種活動の実態を知るために、本学は2012年より「学習時間に関するアンケート」(2019年に「学習に関するアンケート」に改称)を実施しています。実施当初は1年次のみを対象としていましたが、2015年からは調査対象者を1~3年次にまで拡大しました。さらに2018年より学籍番号の記入によって、GPAとの紐付けを実現しました。こうした調整を通して、信大生の学習と大学生活の実態が進級によってどのように変化するかがわかると同時に、各種活動と成績との関係も明らかにすることができました。本号のニューズレターでは、2019年に実施した「学習に関するアンケート」の結果を中心に、信大生の各種活動の時間、成績との関係、さらに進級による活動時間の変化を中心に調査の結果をご紹介します。

図1は調査対象者全体(1~3年次)の授業期間中の平均的な1週間の活動時間を表した内容です。授業への出席は16時間以上が61%、授業に関する自学自習は5時間以下が68%となっています。言い換えれば、7割の学生は一日の自学自習時間が1時間にも満たないということです。一方、アルバイトは11時間以上が42%に達しており、大学生生活の重要な一部となっていることが見て取れます。

図2は、各種活動の時間を平均値に直して絶対値として示した内容です。この作業によって、学年による信大生の活動時間の変化が確認できます。1年次の時は授業を多数履修すると同時に、サークル・部活動とアルバイトにも多くの時間を割いています。2年次になると、授業時間、授業外の学習時間およびサークル・部活動時間が1年次の水準を維持、あるいは増加する一方、アルバイトの時間も大きく増加します。そのため、2年次は信大生の最も忙しい時期だと推測できます。3年次になると、授業時間とサークル・部活動が減るかわりに、資格勉強などの自主的学習の時間が大きく増えます。ここで注目していただきたいのは、授業と関連する「自学自習時間」対「授業時間」比です(図2)。1年次の時は授業をたくさん履修しますが、各授業に対してじっくり予復習できていないことが見られます。

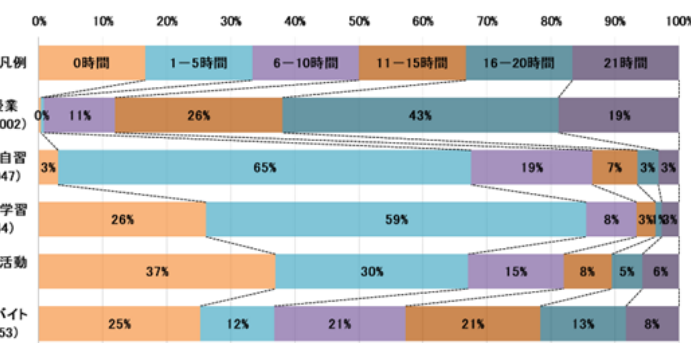
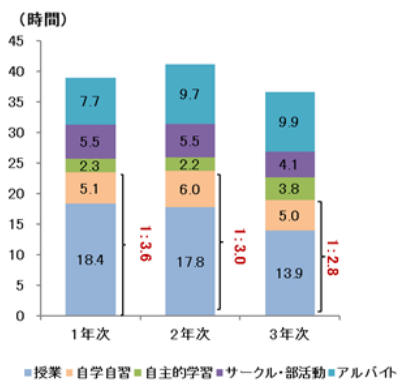


図1 各種活動時間(大学全体・1週間当たり)

図2 各種活動時間(学年別)



■ 授業 ■ 自学自習 ■ 自主的学習 ■ サークル・部活動 ■ アルバイト

2018年度から回答者に学籍番号を記入してもらった結果、回答者のアンケート調査結果と各年度のGPAとの紐付けができるようになりました。2019年度のGPAと2018年度のGPAの相関を見てみると、両者の間に高い正の相関が見られます ( $r = .642, p < .001$ )。学年別で測っても同じ結果が示されています (2018年度1年次⇒2019年度2年次  $r = .619, p < .001$ , 2018年度2年次⇒2019年度3年次  $r = .695, p < .001$ )。

要するに、信大生の在学中の成績はかなり安定的であると言えます。このことは信大に限らず、国内外の研究の中ですでに数多く実証されています。例えば2016年、東京理科大学では大学卒業時の成績は1年終了時の成績とほぼ一致し、入学試験の結果とは相関関係が見られないという調査結果が報告されました (『毎日新聞』2016年6月3日)。日々の学習習慣が成績に影響を及ぼしていると解釈できます。GPAとの紐付けの試みはこの調査の時点でまだ2年目なので、信大の学生の成績は東京理科大学と同じ特徴を持っているかどうかはまだ不明です。今後も継続して調査を実施する予定なので、学生が入学してから卒業までの成績と各種活動時間との関係の解明を楽しみにしています。

学年による成績の変化をより明確に考察するために、まず、GPAによって、学生の成績を「上位 (GPA>3.33)」「中位 (GPA2.67~3.32)」「下位 (GPA<2.66)」という3つの成績層に分類しました。そのうえで、進級したあと、成績層の上昇、維持、下降という移動に応じて、図3のように5つの成績層移動のカテゴリーを作りました。

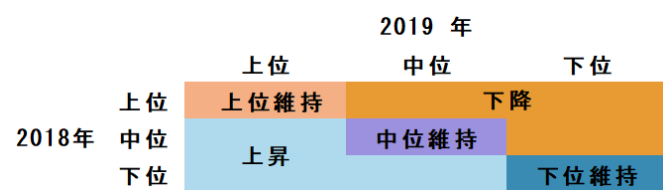


図3 成績層移動の類型

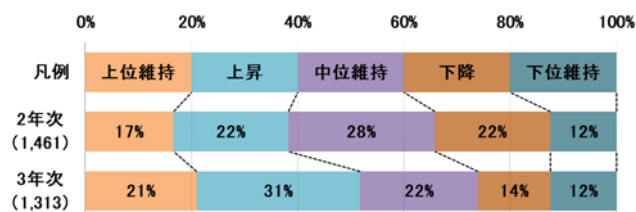


図4 学年次別でみる成績層移動の類型

2018年度と比べ、2019年度における成績層の移動の状況を示したのが図4です。入学年度によって、少々特徴が異なります。2019年度2年次 (2018年度入学) の場合は、前年度の成績層を維持する学生 (「上位維持」+「中位維持」+「下位維持」) が57%に達しており、成績の安定性を物語っています。一方、成績「上昇」の学生と「下降」の学生はいずれも22%います。2年生になってから努力して成績がよくなった学生、逆に慢心して成績が悪くなった学生が同程度です。したがって、1年次の成績が2年次の成績をある程度規定しているとはいえ、努力次第で変わることも可能です。2019年度3年次 (2017年度進学) の場合は、成績維持組の学生は依然として半数を超えます (56%) が、変化組の中では下降 (14%) よりも上昇 (31%) の学生のほうが多いです。こうした成績層の移動は学年によって学習方式の相違によるものなのか、それともたまたま当該年度の調査対象者の特徴によるものなのかは不明ですが、データの蓄積によって、さらなる分析を行いたいと考えています。

紙幅の関係で調査の結果について詳細なご報告を省略します。しかし、調査から興味深いと感じたのは下記の4点です。①1日当たりの、授業と関連する自学自習の時間が1時間未満の学生は、7割近くいること。②2年次の学生が最も忙しいこと。③上記の②と関係するかもしれませんが、成績が上下する学生がそれぞれ2割いること。努力次第で成績が変えられると解釈できます。④現在のデータから言えば、1年次の成績はその後の成績を規定しているという傾向が見られること。今後も、高等教育研究センターでは、教学IRとして各種データの分析・検証を行ってまいります。

(高等教育研究センター 講師 李 敏)

### スタッフからひとこと



新型コロナウイルス感染症のニュースが落ち着くことのない毎日で、先行きが見通せない中ですが、今までどおりがそうでなくなった今、ささやかなことにもプラス思考で日々過ごしていければと思っています。

高等教育研究センターの業務に携わり、3年目を迎えました。引き続き、よろしくお願いいたします。(学務課教務グループ 主査 酒井 のぞみ)